

三五年十月刊)

12 『栄花物語の研究』 第二章 二四五ページ(刀江書院 昭和三年刊)

13 「前渡り」について——源氏物語まで——(『中古文学』十七号) 今井源衛先生の解釈による。

14 さるへきところに夜ことのるしてあか月にはくるものゝほかにとまりたりければ
けさみれは露むすほゝるあさ氷とくるものともたのみけるかな

15 拙稿「藤原相如考」(『鹿児島県立短期大学紀要第二五号』) 参照

16 「高階成忠女考」(『女子大國文』35号)

17 六日乙未(略) 依有召晚景参内、有作文事 初蟬纔一声、心韻、広業序、左大臣、左右衛督、弼中将、左大弁實成、明順、道方、明理、伊頼、道濟等献詩。

18 「日本文学史研究」11(昭和二六年四月) (日本文学研究資料叢書「源氏物語」所収)

19 家集16 「したのはかまのこしに結びて謙徳公のもとにつかはしける 人し
れす思ふこゝろのしるければゆふともとけよ君か下ひも」

20 家集205 「やむことなき人の御ふみひとたひありてまたをとつれもなければ五
月つこもりころに とふほたるまことのこひにあらねとも光ゆゝしきゆふ
やみの空」

〔論文受理 五一・九・三〇〕

追記

三ノ(4)(8ペ)で、「春雨の」歌を後拾遺集の詞書に従い、道長との贈答と解したが、『麗花集』(寛弘二年六月〜同六年三月までに成立。久曾神昇氏説)では「二条のみぎのおとぎなどかさとはのたまひければ」との詞書になっている

る。とすれば、この歌を返した相手は「道兼」となり、問題ののこることを付記しておきたい。

のであろう。それはしかし物語的な世界への憧れではなく、もっと現実的で生活に即したものであったといえる。謙徳公に文を送り、¹⁹ 尊貴なあたりから声がかゝると、たとえまことの恋にあらずとも期待と不安に胸おどらせ、²⁰ 又常に交際相手は権門の貴公子に限られていたことも、内侍の生活意識の表れでなくて何であつたらう。そうした面では呈しく近代的とでもいいうるのであり、物語的姫君のイメージからは程遠く、或意味ではしたたかな面さえも有している。身分低いものの懸想に対しては

をとりたるおとこやなきにふみをさ

してをこせたれば

ふく風になひくとやきく青柳のいとあさましく

おもひよるかな

(家集一一九)

と気位の高さを見せ、きっぱりと拒絶する。

夜がれの悲しみも後悔も比較的冷静で、拒否もはっきりしており開放的である。彼女の意識としてはどんな時にも淡々として優美であることが理想であつたのであろう。

宮廷の文芸的雰囲気の中で育てられて来た馬内侍にとっては、恋愛による魂の燃焼と和歌による文芸が、彼女の生そのものであつたのであろう。

左大将との贈答が比較的素直な感情表現になるものが多いのは、年若かつたころの詠作であるからでもあろう。

交際のあつた主な人々とどまり、三者的表現をとつた人々との

交際には及ぶことが出来ず十分な考察が出来なかつたが、当時の宮廷女房馬内侍の生き方の一端と生活意識の一端について見て来た。当時の女の目からみた女のための人生観、異性観である馬内侍の生活意識及び歌柄等についてもっと詳しい考察の必要を感じている。

〔注〕

1 2 「校本馬内侍集と総索引」笠間書院刊所収（昭和四十七年七月刊）

3 「鹿児島県立短期大学紀要」第二四号（一九七四年二月）

4 尾上八郎「梨壺の五歌仙」（明治三五年刊）。桜井秀「馬内侍伝」（「わか竹」大正二年一・一二月、三年二月号）。本位田重美「馬内侍集覚書」

（「人文論究」昭和三五年六月号）。鈴木一雄「馬内侍——その生涯を中心に——」（「国文学」昭和三四年三月号）「馬内侍」（「解釈と鑑賞」昭和三五年八月号）。竹鼻績「馬内侍伝の一資料——時明集の作者をめぐって——」（「文学・語学」一三三号）

5 勅撰集からの補入を除いた数

6 鈴木一雄・竹鼻績氏の説による。私も同意見。

7 勅撰集よりの補入歌のため（一）をつけた。

8 新古今集では、家集82の「左大将」を道長とし、8（但し、678一連の左大将を朝光としている。

9 続後撰集では、家集6の左大将を道長としている。

10 天元二年六月二日薨去

11 秋葉安太郎・鈴木知太郎・岸上慎二「大齋院前の御集の研究——いはゆる馬内侍歌日記」（日本大学創立七十年記念論文集 第一巻人文科学編 昭和

四月二十八日条)。明順については藤本一恵氏の御論考¹⁶にくわし

いが兄弟中最も派手な性格であったとのこと、『枕草子』二七八段積善寺供養でのその得意満面の姿を清女は「明順の朝臣の心地、空を仰ぎ、胸をそらいたり」ととらえている。高階家の人々はみな学才あり有能だったが、明順も例にもれず、長保五年五月六日内裏の作文会につらなり、道方・道濟らと共に献詩している¹⁷(『権記』)。

ともあれ明順との贈答とすれば正暦四年前後の事であり『玄々集』序文「永延已来寛徳以往篇什也」にも矛盾しない。又家集には

人のきたるにわたのころもとたのめやしけん

62 なかれゆくことの葉にこそしら露のいのちを

かけておきかへりつれ

これをきゝてあきのふの朝臣

63 さ月山みやまかくれの草木とやことのは

たにもかけてちりこぬ

とあり、63が明順の詠である。前者は「あてにならぬあなたの言葉を信じ切っていましたのに」と実のない口約束を信じた男のうらみ言とみられるが、それに対して明順の歌は「(あなたには言葉をかけてくれるだけまだいい)私なぞは数にも入らぬ下草のようなものでしょうな。いっこうにことばさえもかけては下さらぬ」と慰めたものであろう。場に合せた会話である。中宮の兄という立場からも親交のあった一人にちがいない。

以上家集に表れる主な人々との交遊についてみて来た。

七

かつて益田勝美氏は「源氏物語の荷ひ手¹⁸」の中に於て、受領層の娘たちについて「宮仕え女房」と「家の女」の類型に分け、

宮仕へ女房の世界は、上層社会に直接つながって、後述する家の女性の世界の様な、憧憬が夢や想像を誘ひ、ながめが現実の彼方に及び、魂の奥に内向する世界ではなく、現実的処世魂と社会的文芸的教養の巢食¹⁹つてゐる世界である。

と述べられた。最後に馬内侍の宮廷女房としての處世精神とでもいった生活意識の二、三についてふれてみたい。

その一つは生涯にわたる恋愛至上の生活から得たものと言うべきであろうが、男性不信が根強く巢食²⁰していることである。家集23に

しそくなりし人のあるをとこにかたはられてこれなんひと

つまつとてをこせたれば

ひとつ松むすひけりともいまそしるとくる

心はときはならしを

と歌っているのはその最たるものといえようか。彼女の恋愛が決して結婚に結びつかなかったのもここに根ざしてのことである。一夫多妻制下に於ける結婚の、愛の終局における女のみじめさを十分知っていたからでもあろう。又あきる事なき至尊への憧憬があった。

馬内侍はその生涯の大半を宮廷に過した。しかも一般の宮仕人のようにおとなになつての出仕ではなく、幼き日から宮廷で育つたのであった。それ故その生活感覚も雅かなもの、高貴なものに定着した

かすかの、おきのやけはらあさるとも見えぬなきなをおほすなるかな

をも入集させている。

博学多芸な当代一流の貴公子、後宮の才女たちから気恥しさを覚える存在として、尊敬され憧憬された公任との親交は、馬内侍の歌人としての位置づけにもその力の大きく働いていることは否めないであろう。又その親交は宮廷女房馬内侍の自尊心をも十分万足させる対象であったにちがいない。

家集¹⁰⁸に相如との交遊を示す一首がある。

すけゆきあふきををこせてこれはいかにわ

すれやしにしいひやりたれば

郭公わするらむこそうの花のかけとそふべきわれとしらすや

出雲前司相如である。粟田道兼と特に親しかった由、その逸話が

『栄花物語』「みはてぬ夢」にみえる。道信や能宣、元輔、輔昭、

景明らとも親交があった。この歌にはいかにも相如らしい生来の陽気さが表れている¹⁵。

六

『如意宝集』『拾遺抄』『後十五番歌合』『玄々集』『後六六撰』

にとられた「こよひ君」の歌に関して一言ふれておきたい。この歌は、家集では

かたらふ人おほかるおとこのとをき
所なりけるかのほるときくかまたみ
(か群)
るありときくと

返し
155 こよひ君いかなるさとの月をみて都にたれを思ひいつらん

156 宿ことにねぬ夜の月はなかんれともに見しよの影はせき
りき

となつてゐる。「如意宝集」では「月をみはへりてゐなかなるをとこを思ひいて、つかはしける」とあり『抄』『集』も同趣。又『玄々集』では次の如き詞書である。

あきのぶ但馬にありけるに月をみていひやる

さて『道信集』には¹⁵⁶の返歌に近似した「ある女に」との詞書の

やどごとにあけあけの月はなかめしに君と

みしよのかけはせざりき

(桂宮本(二)乙)

がある。傍点部が微妙にちがうが一応注目しておきたい。道信は右大臣為光の三男、永祚元年三月但馬権守に任じた。当代の「いみじき和歌の上手」(『大鏡』)で公任・実方らと親交のあったことから馬内侍とも交遊が或は有ったかとも思うが確かな資料が無いので参考にとどめておく。また『玄々集』のいうように明順——高階成忠三男、中宮の兄で定子立后に際し中宮職をつとめた。中宮内侍だった馬内侍との交遊は当然考えられる。播磨守、左中弁、正四下に至った。——とすれば正暦四年頃但馬守であった(『権記』正暦四年

のに対して、「鳴くべき季節に鳴く声は誰もとがめはしません、おぼめかず勝手にお泣きなさいな。私は何とも思いませんよ」と軽くあしらったもので、若君達公任との宮廷社会における、時宜をえた社交上の贈答であろう。同様に又¹⁰⁵、¹⁰⁷に公任や実方との歌がある。

きんたうのきみこそのはるやりたりしむめの花をふみにさしてをこせたれは

¹⁰⁵ むかしににたる梅のはなかな

といひたれは

¹⁰⁶ 梅のはなむかしのことをうたかへと空のけしきの

かはれるやなそ

さねかたの君えてきたりこのふみあ

りけるをみて

¹⁰⁷ うらやましちりくるあとや都鳥ならひありせば

をくれましやは

(家集)

公任の文をみて羨ましがっている実方である。おそらく後宮での一こまでであろう。

また家集¹¹⁷ ¹¹⁸に次の贈答がある。

るいなる人のせいすれはあはてのみあるにおとこ

¹¹⁷ くれはいかにくしてかはおほ井河るせきの水は

もりぬべしやは

かへし

¹¹⁸ おほ井河るせきにつくむ我なれやけふくれかた

になけきをそする

家集では¹¹⁸が内侍の歌となっているが『実方集』では実方の歌となっておりその詞書も「これはいかなりけるおりにか」(群書類従本¹³⁹)、「ある女にこれはこと」(『書陸部本一五〇・五六〇』¹⁴⁸)と。又『新勅撰集』では「今日と頼めける女に遣しける」としている。作者にくいちがいを生じているわけだが、桂宮本(二)所集の『実方集』

(戊)にある次の歌

もつつ人ありてもいひかたく侍しかば

くれにもといふべきものをおほ井河井せきの水は

もるやもらずや

が¹¹⁷番との類似から注目される。馬内侍が実方と密かに心通わしていたと考えられる資料である。芸術家肌でこだわりのない二人のあややかな恋であったろうか。或は家集所収歌は二首共に実方の詠であるかも知れない。実方は長徳元年正月陸奥守となり同年下っているから正暦年間或はそれ以前のことであろう。さてもう一度公任にもどるが、馬内侍と公任との、事にふれ物に感じての交遊はずっと後年までであったものと推定されるが『如意宝集』や『拾遺抄』『後十五番歌合』に馬内侍の歌を撰び入れている事もこうした若き日からの交遊から、内侍を知り歌を知っていたからであろう。

こよひ君いかなるさとの月をみて都にたれを思ひいつらん

(家集一五五)

を右の三集に、又「抄」には、

と「馬」の草体の類似から、文字定着以前からとすれば、共に内侍であり道隆の室と愛人であったことに起因しよう。

正暦元年十月五日子立后に際して馬内侍が中宮の掌侍となるにつけても、何かと道隆と関係の深かったことがあずかって力の大きかった事と思う。『枕草子』一〇四段、長徳元年二月条には「宮のほらせ給ふべき御使にて、馬の内侍のすけまゐりたり」と記されている。

(2)

家集に「栗田の右大殿」・「右の大殿」と詞書に記された二首がある。栗田右大殿を在衡と見るか道兼とみるか問題であるが、在衡は安和二年七十八才で右大臣となり翌天禄元年七十九才で薨じたことから考えてもやはり道兼と考えるのが妥当であろう。

右の大殿ものしたまてのころいきとこ
ろもしらてほかにあれは

122 しのふれは空に涙もきりみちて恋しき人や

いとこなるらん

あはたの右大殿夜ふかくかへらせたまひてひかけを給はせ
たりしかは御返きこえさせし

140 つゝめともうきに人めのおしければあけは日影の

まはゆからまし

交際の時期はわからないが右大臣時代とすれば正暦年間、中関白

家全盛時代であった。

堀河家の栄える時代には朝光と深い関係にあり、また兼家政権下に入ってはその子息たち、道隆、道兼らと親しく、中関白家全盛期に仕えた馬内侍は、これらの人々との交際も結婚に結びつくものではなかった。背後の権勢の波の間に間に浮沈する当代官廷女房の、身の安定を求めての生活意識の典型的な表れであったのかもしれない。が、一方所詮は権力者の恰好な弄び草にすぎなかったとの見方も又一理あるう。

五

五月五日にこの君

54 郭公いつかとまちしあやめ草けふもいかなる

ねをかなくらん

かへし

55 五月雨の空くもり(い おほれ)するほととぎす時になくねは

人もとがめす

(家集)

右の贈答が『新古今集』に入集、「馬内侍に遣しける 前大納言公任」とあり、『公任集』にも見えるので「この君」なる人物が公任卿であることが知られる。

公任は、康保三年(966)生れ、馬内侍より十五才程も年下である。この贈答の意は「お逢いできるのはいつかと待っていましたでしたが五日の今日、どんな風に泣いて恨めばよいのでしょう」と公任が贈った

しまいましたのね¹³」。「今夜行こう」などと人をあてにさせておきながら図々しくも見えすいたお世辞のみ言つて素通りしていく愛人に対しての切り返しではあるが、比較的冷静で締靨が感じられ、ひたすら待ちわびる女の、すさまじいばかりの焦躁は感じさせない。また『後拾遺集』⁷⁰¹番には

なかの関白女の許より暁に帰りて内にもいらでとに居ながら
 婦侍りければよめる

あかつきの露は枕におきけるを草葉の上と

なに思ひけん

これも前渡りの例であろう。さすがに心咎めて御気嫌伺いをしたものであろうが、女の歌には恨みをかねてはいるものの、男を心から信頼してまっていた自らのおろかさを客観視する自嘲的態度がみられる。同種の歌は家集¹⁵⁰にもみえる。¹⁴ また同集の

中関白通ひ始めける頃夜かれして侍りけるつとめて今宵は
 あかしがたくてこそなといひて侍りければよめる

独ぬる人やしるらむ秋の夜をながしと誰か

君に告げつる

(後拾遺集⁹⁰⁷)

などは蜻蛉作者の「嘆きつゝ独りぬる夜の明るまはいかに久しき物とかは知る」を想起させる反撃である。

また家集¹⁰³には「人かたらふときゝたまひて中関白 あやしきはぬれぬ人なきそめ川のかゝらぬ袖もくちはてぬへし」とあり馬内侍の多情さをも垣間見させている。

さて、家集¹¹¹には「このみしるくて」とあった。『和歌色葉』には「隆圓大僧都 中関白息・母馬内侍」とある。が、『尊卑分脈』は「母同伊周公」とするので、その母は高内侍であり、定かな事はわからないが、隆圓が小松僧都と号した事から家集¹⁴⁷の「人のこ松といふところに侍しに雪のいたうふりしかはつかはし」の贈答が多少とも気にかかる。

前述『後拾遺集』の二首についても問題がないわけではない。『八代集抄』や『旧作者部類』は作者を「高内侍」とするからである。

高内侍、馬内侍の混同はこればかりではなく説話にもみえる。即ち『古今著聞集』の「中関白道隆馬内侍に通ふ事」に「父成忠卿うけぬことに思けるに」とあり、この説話、高階成忠を父とする高内侍との混同であること明白である。又『岷江入楚』「末摘花」の註釈中の「三の友」には

(略) 日本にて用へきならば詩のかかりには歌にてもあるへし。

その上日本の女房の詩作る事も其例おほし。馬内侍にてやよく詩をつくりける事大鏡にみゆ (略)

(傍点筆者)

とある。高内侍貴子については『大鏡』道隆伝に、

それはまことしき文者にて、御前の作文には文たてまつられしとよ。少々のをのこにはまさりてこそきこえ侍りしか。

と伝えられる。当時の女性としては稀な、文才にたけた婦人であった。『岷江入楚』の傍点部は当然『大鏡』の記事をふまえて「高内侍」とあるべき所である。混同の原因は文字定着後とすれば「高」

長も馬内侍と兄達の変愛関係はよく承知であつたらうし、そうした内侍に対しては親しみと一種の甘えのまじった感情を抱いていたのではなかったか。そしてずっと精神的にも大人の内侍は、年若い君達とのいわゆる遊びを楽しんだのではなかったかと思う。従来いわれるようにいわゆる恋愛と結びつけるのはどうかと疑問を感じている。

四 (1)

朝光、濟時と共に親しく酒の上での友でもあつた道隆と内侍の關係は、家集¹⁰³ 111番及び『後拾遺集』⁷⁰¹ 907番等の歌により知られる。また家集¹²⁴ 125の贈答の詞書

五せちのところにしのおほとの、少將にてをせし、時見つけたまうてかゝる事などありしかは

の傍点部「大殿」を道隆と解すれば、少將の頃(天延二年十月⁹⁷⁴)貞元二年正月⁽⁹⁷⁷⁾から關係があつたことにならう。既に先学の論ぜられるところではあるが、この道隆少將に關連して、百人一首に有名な赤染衛門の「やすらはて」の歌が『馬内侍集』にも¹⁶²番に有り、その詞書が『赤染衛門集』『後拾遺集』入集同歌の詞書と趣を同じくするところから、かつて馬内侍・赤染衛門姉妹説などが生れたのだったが、これは『袋草子』所引の『江談抄』でもその誤りが明らかかなように赤染時用・源時明混同によるもので松村博司氏¹²により否定されている。

一応参考までに両者の詞書をあげておこう。

馬内侍集

こよひかならすこん
とてこぬ人のもとに

162 やすらはてねなまし

物をさ夜ふけてか
たふくまでの月を
みしかな

赤染衛門集(群書類従本)

3 中関白殿(道隆)の藏人の少將ときこえ

しころはらからのもとにおはして(略)

4 同じ人たのめておはせすなりにしつとめて

たてまつれる

後拾遺集

なかの関白少將に侍りける時はらからなる人に
680 物いひわたり侍りけり、たのめてござりけるつ
とめて、女にかはりてよめる

時に朝光は父の威光で昇進を続け、右近中将から藏人頭をへて参議に列したころと時を同じくし前述の如く馬内侍との交際も続いていたころと察せられるが、道隆・馬内侍の關係は朝光との間を一時疎遠にしたであろうことは否めまい。さて家集¹¹¹ 111番に中関白との關係を示す次の歌がある。

中関白をはせむとのたまてまへわたりたち花のかきりおら
せてすきたまひぬれは

こち風にこのみしるくてたち花のためじことの
すきぬめるかな

『古今集』¹³⁹ 読人しらず「さつきまつはな橘の香をかげば昔の、ひとの袖の香ぞする」を利かせて「懐しい」と御氣嫌とりに橘を投げ入れたまゝ前渡りして行く道隆である。内侍の歌の意は「このみに「子のみ・木の実」をかけて「あなたとの間にはまぎれもない子供まで成した仲、それなのに訪ねて下さるとのお約束もうそになって

系図に見るように朝光の母明子女王と選子内親王は従姉妹であり、また安子と朝光の父兼通とは共に師輔の子。従って安子を母とする円融院や選子内親王は、兼通を父とする朝光や皇子とは従兄弟、従姉妹の血族関係にあった。「大齋院前御集の研究」¹¹に於ても「特に関係深い外部の人」として「閑院左大将朝光・左衛門督重光・實方」をあげておられるが、『大齋院前御集』を繙けば、二一〇番から二一四番にわたる姚子裳着についての選子からの心付けをめぐる歌の連作がある事からも肯ける事である。当時すでに父を失い、続いて姉の中宮皇子が崩じ、権勢の谷間にあつて悲嘆にくれていたころの朝光ではあつたが、こうした血縁関係から、愛人馬内侍を、皇子亡きあと従兄妹の選子齋院のもとに出仕させたのではなかつたか。家集における朝光との贈答の中にも齋院時代のことを暗示する前述12・13・80の詠歌がある。又、朝光との贈答ではないが、

むかし見しともたちの賀茂のまつりのしたいにいて、
かくなまいらるといひたれば

¹⁶⁷ 君しもあれ道のゆき、をさたむらんすきぬる人は

かつわすれつゝ

みそきの日しのひてかたらふ人々の

もとより

¹⁰⁹ うしろめた神もき、いれぬことなれば我をわするゝ

みそきしつらん

なども齋院出仕時代を暗示している。

齋院における馬内侍の位置は、『大齋院前の御集』によれば、宰相・進らと並びかなり重要な地位にあつたのかの如くであり、特に公の歌日記的性格をもつた『前の御集』の筆録者ではなかつたかとも言われている。¹¹『大齋院前の御集』と『馬内侍集』の歌の重なりは四首あり、その中三首が馬内侍の詠である。

(4)

ついでに道長とのことについて私見を述べておきたい。道長との関係を示す資料は前に述べた『後拾遺集』からの補入になる次の歌のみである。(前述の理由で新古今集・続後撰集の「道長」とする歌を含めない。)

入道前太政大臣兵衛佐に侍ける時一条左大臣家にまかりそめてかくなんあるとはしりたりやといひをこせて侍ける返事

²⁰⁸ 春雨のふるめかしくもつくるかなはやかしは木の

もりにし物を

これは道長が一条左大臣雅信女倫子のもとに通うようになったことを知らせて来たことに対する内侍の返歌で、道長との贈答とみられる資料である。「とづくに聞えて来ていますのに古めかしくも今ころお告げなさいますこと」と多少の皮肉をこめて怨んでみせるポーズをとつたものか。道長兵衛佐時代は永観二年(984)二月一日、19才(寛和二年(986)七月二十三日、21才で、馬内侍三十五才前後のこと。因みに道長の倫子との結婚は永延元年十二月十六日(987)である。道

に

かへし

なけきつゝ我もねなくにみゆるゆめのなくさむかたはなきとこそ

きけ

(榜点筆者)

中宮皇子の弟朝光と恋愛関係にもあり、女房としてもすでに相当な存在になっていたものである。二十九才のころの事である。

また『朝光集』には

むまの内侍のみなみなるいゑに、十二月廿日はかりにわたる、松ともにつけて

はるちかきとなり君はすみのえのまつひとゝはたおほゝゆるかな

返し

冬こもりこほりにとちてみつかきもはるのとなりにとくやとそ思ふ

の贈答がみられる。馬内侍が朝光邸の南側の家に移った時のものの心の和みを機待している恋人同士のスなおな贈答のように見受けられる。

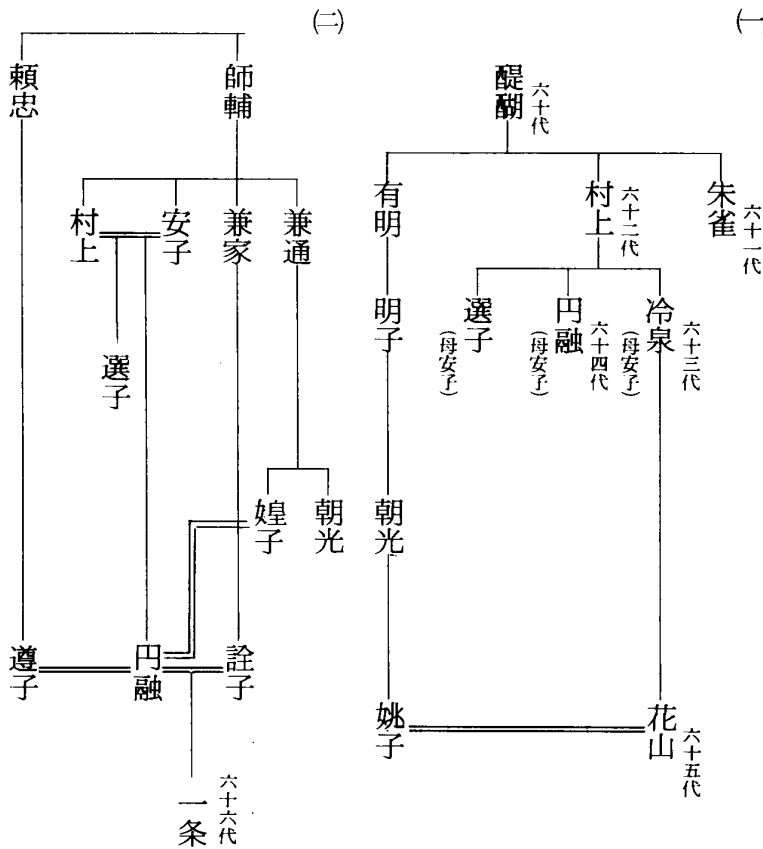
朝光は父の死後間もなく姉の皇子を失い¹⁰、打続く不幸に打ひしがれ、努力の甲斐もなく花山院に入内した娘の姚子もその寵を失う結果となり、兼家の権勢下において、左大将に長年在任したまゝ昇進も滞り、遂に故枇杷大納言延光の北方に住みつく醜聞を生んだことは『栄花物語』や『大鏡』岩瀬本にくわしく伝えられるところであ

る。馬内侍との交際は、天禄の頃親しみそめてから、皇子後宮出仕時代・選子齋院出仕時代の交ではなかったかと考えている。

(3)

さて、馬内侍が、朝光の姉皇子の薨去後、どうした縁から選子内親王に仕えることになったのであろうか。私は次の如く推定している。

次に示すのは、円融院・選子内親王をめぐる皇族方の略系譜と、その母安子方の略系譜である。



ちに逢いたい、君が恋しいとの精一杯の御気嫌取りの演技なのであろうが、前にも述べた如く女の気持がそれによってほぐれるわけではない。内侍は

26 いとしくぬれのみまさる衣手にあめふることを

なにゝかくらん

「あなたのお越しがなくて私の袖は『そう濡れそぼっていますのに、あなたはどうしてそんなことが御口に出来るのでしょうか』と切り返している。又、左大將が氷を包んで『君の冷たさが身にしみる』と言って来た。内侍は、これに対して

11 あふことのとこほるまはいかはかり身にさへしみて

なげくとかしる

「私がどんなにあなたの冷たさを身にしみて感じているか、あなたは御存知ないのでしょうか。身にしみて冷たさを感じているのは私の方よ。」とみごとに切り返しをみせる。

また内侍が齋院に仕えていた頃のものと思われる次の贈答がある。

「男を近づけないでゐた頃、男からむりやりに入って来るのがやり切れなくて、後でお逢いしましょう、と誓言を立て男を追いやったところ、一日程して歌を送ってよこせた」との詞書で

12 いのりくるわかかたをかのちかことをそくたゝすの

神にも有かな

「ひたすら祈り続けて来た賀茂にかけた誓いをなかなか神様はかなえて下さらないのですね」の意だろう。女の返歌は、

13 逢うことをかたをかとのみおもふ身はな

にゝたゝすの神にかくらん

「逢うことを願っているのは、あなただけのことと思っている私が、どうして糺神にかけて逢うことを祈ったりするのですか」と、けろりとしている。いさゝかしたゝかさをのぞかせた所である。又、馬内侍の心変りを左大將が察した為か、以前に内侍が誓って渡していた誓言文を送り返して来て、『代りの文』をよこせと云って来た。つまり「言わけが出来るならしてみろ」というのである。家集80にその返歌が見える。

80 ちはやふるかもの社の神もきけ君わすれすは

我もわすれし

内侍の歌は、こうした時にも一種のゆとりと堂々としたところがあつた。賀茂齋院出仕時代と見られるから三十才代後半ころであろうか。結婚に結びつかぬ恋愛は、双方に原因があり必ずしも二人の間はうまくいかなかったようである。

時代が前後するが、貞元二年(97)十一月八日朝光の父兼通が五十才で薨じた。その頃内侍は円融院後宮の皇子のもとに出仕していたようで、内裏からの御使いとして遣されたことが『朝光集』に見える。

ちゝおとゝの御ふくにてもし給に、内よりむまのなしいし
を御つかひにてとはせ給へるに、その夜とゝめてあか月に

いかてかはゆめにも人のみへつらんもの思ひそめしのちはねなく

24 つかのまもこひしき人はつれ／＼となかめに物や

おもひますらん

とおくり、雪のひどく降る日に訪れては

31 としふともきゆるよもあらし白雪の千とせのまつに

ふりしつもれば

と変らぬ愛を誓った仲であったが、通い所の多い当時の男性の常としてだんだん足が遠のくのであろう。世の常とはいえ、内侍の夜がれを嘆く歌が目立つ。

左大将ひさしくをともしたまはて

6 あふことのなきさなればや都とりうらみてあとも

たえてとひこぬ

なとかそれよりも

久しく音信もなかった左大将から「このごろは逢うこともないからか君はすっかり私を恨んで手紙もくれないんだね」の歌にそえて「どうしてそちらから手紙をよこさないのだ」と云って来る。内侍は数まえられぬ我身の嘆きを次のように返している。

7 とはぬまは袖くちぬへし数ならぬ身よりあまれる

涙こほれて

また、

むけにおとつれたまはぬころ

27 くもてさへかきたえにけりさゝかにのいのちをいまは

なにゝかけまし

28 なけきつゝふれとも数にあらぬ身はいかゝはすへき

しつのをたまき

「たのみのあなたに望みのかけられなくなった今、私は何に生命をかけて生きたらよいのでしょうか」また「嘆きながら日が経ちますが、数にもあらぬ私は一体どうしたらよいのでしょうか」とあてにならぬ男へその嘆きをおくる。

男は返し歌に

29 かくてこそよそにふれともさゝかにのいかに恋しき

ものとかはしる

「たとえこのように別れ別れに暮してはいてもどんなに私があなたを恋しく思っているか、あなたは御存知か。」恋しさが思いしらされているなど口先だけはあまいことを言って慰めようとする。が、女にとってその気やすめな慰めが何になると言うのであろう。男の苦しい辨解も、慰めも、御都合主義な実のない口先だけのことにすぎないことを女は知りすぎる程に知っているからである。

久しくありておほしいてて

25 ほとふれはわすれやしにし春雨のふることのみそ

われは恋しき

「昔のことがなつかしくてならない。時が経ったので君はもう忘れてたろうか」と男は久しくごぶさたしてやっと思い出しては送って来る。女の手きびしい恨みをかう前に夜離れをカバーして、又近いう

同 六月十九日任右大臣。二十日左大将如元。

31 同 二年七月二十日任左大臣。八月九日辞大将。

(『公卿補任』より抽出)

馬内侍とは年令的にもほゞ同年輩で、在職期間も二十七才と三十九才に至る青年期にあった、そしてその家集『朝光集』にも馬内侍との交際を裏付ける贈答があることから、「左大将」を朝光と見て妥当ではないかと考えている。これに対して道長は、長徳元年四月、濟時の死によって左大将となり、その任には翌二年八月九日まで約一年三ヶ月余あったもの、その間に長徳元年六月十九日には右大臣となり、更に翌二年七月二十四日には左大臣に昇進した。従って道長が「左大将」と呼ばれたのは、長徳元年四月二十七日から六月十九日に至るわずかに五十日の短期間であって、すぐ「右大臣殿」と呼ばれることとなったはずである。また年令的にも天曆五年ころの生れとみている馬内侍とは十五才ほどの年下であり、たとえ一時的な関係はあったとしても、家集にしばしば登場する「左大将」とは考えがたいからである。

(2)

さて朝光は、藤原兼通の四男、兄の顕光より官位の昇進が早く、権勢もえていたことはよく知られている。が他面又文芸的造詣も浅くはなかつたのであろう『朝光集』を残し、勅撰集には『拾遺集』以下二十九首入集。天延三年二月二十七日庚申「堀河権中納言朝光

歌合」及び永観のころには「左大将朝光男女房歌合」など催している。当代の花やかな貴公子であった。

馬内侍との交際は、前掲の、家集82の贈答歌にみる如く、左大将が兵衛佐であった時に見初められ交際が始ったと解される。朝光が兵衛佐であったのは安和二年⁽⁹⁶⁹⁾閏五月二十七日から天禄元年⁽⁹⁷⁰⁾十二月十日右少将となるまでの間である。従って詞書の「左大将兵衛佐にてをせし時うつきに物をいひそめたまで」によれば、安和三年(天禄元年)の四月ころからの交際ということになる。二十才頃のことである。

82 ほとゝきすこゑをはきけど花のえにまたふみなれぬ

物をこそおもへ

かへしかしは木のわかき葉にさして

83 ほとゝきすしのふるものをかしは木のもりても声の

きこえけるかな

いかにも初々しい贈答である。

朝光集によれば、朝光は、馬内侍の他に小大君、宮の君、中将の君、中宮の宣旨などの女性と交際のあったことが知られる。中でも少将時代からの小大君との交際はよく知られているがそうした中にある馬内侍との交際であると考えねばなるまい。二人の恋歌の一端をのぞいてみよう。

雨が降っているのに蜘蛛が巣をかけているときいては自分を待っているであろう恋人を思いやって

は家集中の「左大将」を朝光と道長の二人に解し⁸、「続後撰集」

では「新古今集」に朝光と解した一連の歌を道長と解している⁹からである。また家集では「左大将」と記すのみで実名は記されてなく、道長との贈答も勅撰集から補入されたもののみである。「新古今集」「続後撰集」の成立は当代を隔つこと二百年余でもあり、撰集に用いられた資料、撰者の解釈等によってそのちがいが生じて来るものと思われるので、持に拘泥する必要もないのではないかと考える。憶測ながら七代集の入集歌を重複して採らなかつた「新古今集」の撰者は、

入道前太政大臣兵衛佐に侍ける時一条左大臣家にまかりそめてかくなんあるとはしりたりやといひをこせて侍ける返

事に

馬内侍

春雨のふるめかしくもつくるかなはやかし

は木のもりにし物を

の「後拾遺集」入集歌と類似の、家集8283番の歌

左大将兵衛佐にてをはせしときうつ

きに物をいひそめたまで

ほととぎすこゑをはきけと花のえにまたふみなれぬ

物をこそおもへ

かへしかしは木のわかき葉にさして

ほととぎすしのふるものをかしはきのもりても声の

きこえけるかな

馬内侍私論

(傍点筆者)

の贈答を入集させるにあたり、「左大将」を「後拾遺集」の「兵衛佐」と同一人物「道長」と解して、

兵衛佐に侍りける時五月ばかりによそながら物申し

そめて

法成寺入道撰政太政大臣
(イ性)

¹⁰⁴⁵時鳥声をばきけど花の枝にまだふみなれぬ物をこそ思へ

としたのではなかつたか。

さて、「馬内侍集」に言う「左大将」を誰とみるのが妥当である

かについては、拙稿「馬内侍集成立期に関する試論」でもふれたが、結論的には次に示す安和と長徳に至る間の左大将六人のうち、

伊尹^才 46—49 安和二年十一月十一日転左近大将

天禄元年七月十八日辞大将

頼忠 47—54 同 八月五日転左大将

貞元二年十一月三日依上表止大将

朝光 27—39 同 十二月九日兼左大将

永延三年六月二十七日重辞大将并大夫等依病也被優許。

道隆 37—38 同 七月十三日兼左近大将

永祚二年五月卅日辞大将

濟時 50—55 同 六月一日転左大将

正暦六年(長徳元年)四月二十三日辞大将

道長 30— 長徳元年四月二十七日兼左近大将

な和歌を集録したという能因法師の『玄々集』にも同歌と他二首の計三首がとられ、少し時代が下って、公任の『三十六人撰』になら
い後撰・拾遺時代を中心に三十六歌人の詠を撰んだ『後六六撰』に
も同歌と家集18・206の三首が撰ばれている。また『明月記』天福元
年三月廿日条には

典侍往年幼少之時、令參故齋院之時、所賜之月次絵二卷年来所
持也

今度進入宮、詞同彼御筆也、垂露殊珍重之由、上皇有仰事云々、

件絵被書十二人之歌被分
月々

正月敏行
云々

二月清少納言信實卿參
梅帝之所但無歌

三月天曆藤
帝御製

四月実方
朝臣

五月紫式部日
記曉景叙

六月業平朝臣秋
風吹告權

七月後冷泉
院御製

八月道信朝
臣出告

九月和泉式部
帥宮町門

十月馬内侍
時雨

十一月宗貞少将木
通女之姿

十二月四条大納言
北山之景叙

二巻絵也。

(傍点筆者)

とあり、月次絵屏風の十二人の歌人の一人として十月時雨の歌が撰
ばれている。

馬内侍の歌人としての評価及び力量の実態は大方こうしたところ
で理解されよう。

馬内侍の歌には純粹な自然觀照の詠作は少なく、恋にからめて詠
作されているのがその特色といえる。家集中の自詠歌の中、何らか
の形で恋歌とみられるものの百分比を求めてみると、六三、三%と
なり、歌数にして約八三首を占める。これはかつて竹内美代子氏が
『紫式部集評釈』の中で述べられた『小野小町集』五三%、『清少

納言集』四三%、『紫式部集』二三%、『赤染衛門集』一七・五%、
『伊勢大輔集』二八%、『和泉式部集』四四・五%という百分比に
比して、はるかに高い比率となっている。世にいわゆる恋愛歌人と
評される所以であろう。

馬内侍は、幼き日から齋宮女御徽子のもとにあり、村上天皇崩御
の後は円融後宮に、また大齋院選子、定子後宮にと出仕⁶、その生
涯の大半を宮廷に過し、それぞれの後宮の文芸的雰囲気にもふれた
女房であった。この多岐にわたる宮仕えの間、摂関政治下に於ける
世の移り変りと共に浮沈する権門貴公子たちや歌人たちとの交遊が
あった。以下その交遊について、家集を中心としてみてゆきたい。

三

家集に官職名及び名の記される男性は、左大将、中関白、右大殿、
謙徳公、公任、あきのぶ、すけゆき、さねかた、(道長⁷)らであ
る。他は三者的に記されるが、これら権門の貴公子や歌人たちの名
を記しとどめたについては、やはり馬内侍の何らかの意識の表れと
見なければなるまい。この中最も関係の深かったと見られるのが左
大将である。

(1)

『馬内侍集』に云う左大将について藤原朝光とする見方と勅撰集
の記名から道長とみる二つの見方がある。この二人の混同される原
因は二人共に兵衛佐、左大将を経ている点にあり、『新古今集』で

馬内侍私論

——交遊を中心に——

福井迪子

一
本稿は、かつて公にした拙稿「馬内侍伝本考¹」「馬内侍集の編纂意識について²」「馬内侍集成立期に関する試論³」などと一連の考察であるが、主として交遊関係を中心に、そこに関連する様々な問題についての考証をも含めた。何分、資料の大半が和歌資料に限られるため十分な考察や確実な裏付けがむづかしく推定のみにとどまるものが多い。又、解釈力の未熟さから十分状況を把握出来ないことを遺憾に思うが、馬内侍の交遊や和歌を通して、円融、花山、一条朝宮廷女房の歌及び生活意識のいくらかでも垣間見たいと思つたのである。

考察にあたっては先学諸氏の御論考⁴を参照させていただいた。なお『馬内侍集』本文は三手文庫本によった。

二

中古歌仙三十六人の一人に数えられ、家集を残している馬内侍に

ついて『悦目抄』『八雲御抄』『十訓抄』等は、一条朝における紫式部、清少納言、和泉式部、赤染衛門らに比肩する歌人としての評価を与えている。その実態を把握すべく現存歌の状況からみておきたい。

家集所収歌二〇七首⁵（三手文庫本）のうち馬内侍自身の詠作歌とみられるもの約七割弱の一三一首（但し詞書の曖昧なもの、詞書の無いものがあり判別しがたく、見方により多少の変動あり）、勅撰集入集歌は、『金葉和歌集』三奏本入集歌三首をも含めて『拾遺集』以下四三首。そのうち家集所収歌と重なるもの四一首。私撰集に採られたものは『拾遺抄』二首。『如意宝集』一首。『麗花集』一首。『後十五番歌合』には和泉式部と番えて一首。『玄々集』三首。『後六六撰』に三首。『統詞花和歌集』四首。『後葉和歌集』二首。『万代集』に九首が入集している。その他に日本大学蔵『大齋院前の御集』の出現によって明らかにされたいわゆる「馬」の詠作四二首。同時代の私家集に散見するものとして『齋宮女御集』に四首、『閑院朝光集』に三首、『公任集』に一首、『實方集』一首、『小大君集』一首、『清慎公集』一首等を入れて、重複歌を除いて約百八〇首余りが、馬内侍の自詠歌として現存している。

このうち、さきにも少しふれたが公任撰『如意宝集』・当代の秀歌集といわれる『後十五番歌合』に家集55の「こよひ君いかなる里の月をみて都にたれを思ひいつらん」がとられ、また貫之の『新撰和歌』が「玄之亦玄」三六〇首を集録しているのにならって、玄妙